

## 収入が減って生活が苦しい

～困りごとアンケート調査を実施して～

「困りごとアンケート」実行委員会 事務局

新型コロナウイルスの流行が続く中、地域で困りごとを抱えた方が多くいるのではないかと今回の「困りごとアンケート」を実施しました。10月、みどり病院、華陽、こがねだ診療所周辺を、岐阜健康友の会員と職員がアンケートと返信用封筒を送りいただきました。スマホからのWEB回答も実施しました。11月末までに640人の方から回答を頂きました。

返信アンケートには相談希望欄があり、52名の方が記入されていました。みどり病院地域連携・よろず相談室の相談員の援助も受けながら電話での対応を行いました。

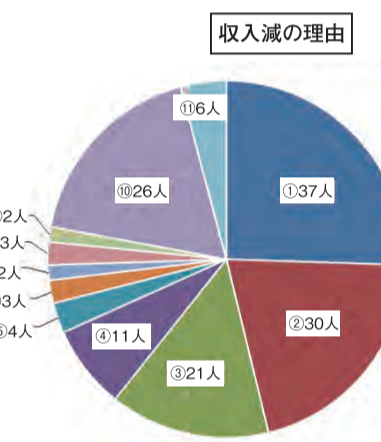
アンケートの回答の特徴は以下の通りです。

①みどり病院周辺の高齢化率(65歳以上高齢者の占める割合)は39%、華陽診療所、こがねだ診療所周辺はどちらも約30%です。全回答者のうち、70歳以上は60.8%で、高齢者の方から多く回答を頂きました。

②4人に1人が「収入が減って生活が苦しい」(145人、23%)と回答し、7人に1人が「食費を削らなければならぬ」(96人、15%)、「支払いに困っている」(94人、15%)と回答されました。新型コロナウイルス流行に伴い「出勤日数が減った」(30人)、「失業、辞めた」(21人)が特徴的です。「年金が少ない」という高齢者の声(37人)も多くありました。

※下のグラフを参照

③「買い物に行くのが困難」な人が91人(15%)でしたが、その理由として「交通手段がない」(34人)よりも「体力がない」(50人)の方が多くありました。また、免許返納後の移動手段について不安の声が多くありました。この課題は、今後ますます大きな課題になっていくと思われます。



④「病院に行くことが困難」と回答された人が117人(18%)でした。新型コロナウイルス流行の中で「感染が心配」という人が40人おり、受診抑制につながっていると思われる。また、「一人で行く体力がない」という理由も26人からありました。

⑤「コロナ禍の生活により体調が変化」した人が、339人(53%)ありました。多くの人が体調に変化を感じています。

⑥「相談できる人がいない」と回答した人は123人(19%)でした。「信頼できる相談相手・相談所」が求められています。

みどり病院、華陽診療所、こがねだ診療所と岐阜健康友の会は、地域の困りごとへの解決のために「困りごと相談電話」を下記の通り開設しています。お困りごとがあるときにご相談ください。

地域には、私たちと同様、様々な地域課題に取り組みでおられる団体、個人の方々がたくさんいらっしゃいます。そうした方々と連携し、安心して住み続けられるまちづくりの一端を担っていきたくと考えています。

**困りごと相談電話**  
 ☎:070-7579-4433  
 (相談時間/平日 月～金 9:00～17:00)

## 視界に入るみどり病院リニューアル

つくろう！手作りで建築に参加するスペースを！

岐阜健康友の会 会長 大塚研二



力作ぞろいのぬり絵

「地域にひらかれたみんなにやさしい病院」の建築工事が8月に始まる予定です。このリニューアルに合わせた企画の第1弾の「新病院のぬり絵」に小さい子どもさんから若い方、年配者の方みなさんまでたくさんの方の応募がありました。いずれも力作ぞろいで、新病院への期待の大きさが現れているこのぬり絵がみどり病院の待合室の窓を飾っています。来院の際には是非ご覧ください。病院を入手にありません。



公式ラインに登録を

「健康とくらし」1月号でご案内したように、「岐阜健康友の会」の公式ラインを開設し、1月1日から発信しています。病院のリニューアルについての情報とともに、友の会の活動紹介、各事業所からの情報、新型コロナウイルスについての情報(感染対策など)などをアップします。QRコードで登録すると、ラインのメールで情報が送られます。登録を呼びかけましょう。※3ページのQRコードから登録出来ます。

建築に手作りで参加の工夫を

建設運動推進委員会では、新病院の建設にあたり、私たちが何かの形で参加できるスペースを検討することにした。石川県の城北病院や大阪府の耳原総合病院のホスピタルアートなどが参考にあっていきます。建設運動に弾みをつけ記憶に残るような取り組み方を工夫できればと思います。是非、色々なアイデアをお寄せください。

コロナ禍でも友の会の活動を

新型コロナウイルスのオミクロン株の感染拡大で私たちの活動もまた困難が予想されますが、それだからこそ、活動や働きかけが待ち望まれます。(感染対策を十分にとりましょう)「困りごとアンケート」に寄せられた事柄からも、友の会への期待を感じます。また、社会情勢からも私たちの出番が要求されるのではないのでしょうか。病院のリニューアルの事業を推し進めることは、こうした課題への取り組みと一体のものであります。仲間、会員、誘う仲間とともに力を合わせましょう。

健康 春秋

雑誌「世界」1月号の記事「ネグロスからの手紙」には、今私たちの日常では考えられない人権弾圧の状況が伝えられています▲手紙の筆者はクラリッサ・シンゲソンという二人の息子を持つ40代の女性で、人権団体の要職にありますが「ターゲットリスト」に載せられて、今拘束、または殺害の危険にある状況におかれています。独裁国家フィリピンのドゥテルテ大統領は、「殺せ、奴らを全員殺せ。奴らを終わらせろ」と指示し、今政府の不正に抵抗する人々を、「リスト」を作って実行しているのです▲いつ拘束され殺されるかもしれないという日常のスレスレに耐えつつ、それでも活動をやめない彼女たちの勇気。これを例えれば日本の戦前治安維持法下で、常に特高警察に監視されていた、共産党員の日常の困難な闘いと比較できそうです▲今日の日本の右派政治家たちは、憲法を改悪し、九条を骨抜きにすることで、戦争のできる国にしようとしています。そのために、共謀罪や盗聴法等、人権を抑圧するシステムが着々と進められています。このような政治状況を変える必要があります▲ただ、クラリッサは「政府に異を唱える者たちを狙う人権侵害はフィリピンに強固に横たわり、再び私を打ちのめした」として、ドイツへの移住を決めました。その絶望にどれだけ思いを寄せることができるのか、問われているようにも思えます。(K)

※ネグロスとはフィリピンの島の名前です